豊玉町文化財調査報告書第５集

イノ隈（さえ）遺跡

―― 対馬豊玉町佐保浦所在の埋葬遺構群 ――

１９８４

豊玉町教育委員会

発刊にあたって

昭和57年度に実施しました本町佐保所在のイノ隈遺跡に関する調査の結果を，報告書として公刊することになりました。数多くの遺跡の存在で知られる対馬浅茅湾奥の佐保地区では，以前から，貴重な各種の出土品が確認されており，注目されていたところでもございます。

今回の調査は，町道佐保・田線の拡幅工事に伴う緊急発掘調査として実施したものであります。この遺跡は旧奴加岳村役場敷地内にあり，同役場建設の折には，石剣や土器が出土し，隣接するキロズガ浜でも青銅矛が出土したことが知られています。しかしながら，長い年月のうちに所在がわからなくなったものや，記録が無くなったものもあり正式な調査は行われないまま今日に至っていました。

文化財保護に携わる者として発掘調査はもちろん情報の収集，文化財の保存・保護については，その重要性を後世に大切に伝えたいと考えます。

このたびの報告書が，その意味において文化財保護や学術研究の資としていささかでも活用されることとなるならこれに勝る喜びはありません。

おわりになりましたが，調査を担当いただきました県文化課の方々，ならびに阿比留万寿氏をはじめとする地元の皆さまのご協力に対して深甚の謝意を表し，発刊の挨拶といたします。

昭和59年３月１日

豊玉町教育長　佐　伯　英　雄

例　　言

1．　本書は豊玉町教育委員会が，昭和57年１月13日～23日に実施した道路拡幅工事に伴う，長崎県下県郡美津島町大字佐保所在のイノ隖遺跡緊急発掘調査の報告書である。

2．遺構・遺物の実測は村川と安楽があたり，製図は安楽による。

3．キロズガ浜出土の中広青銅矛実測および製図・写真は藤田和裕による。

4．本書に使用した方位はすべて磁北である。

5．本書の執筆および編集は安楽による。

調　査　関　係　者

豊玉町教育長　　佐伯英雄
〃　事務局長　　中村武夫
〃　社会教育係長　　奥田尚義
〃　主事　　松井雅美

県文化課文化財保護主事　安楽　勉（調査担当）
〃　文化財調査員　　村川逸朗（　〃　）

発掘調査協力者

阿比留万寿・阿比留常代・安野里子
吉田エミ子・中村美佐子
このほか調査期間中県文化財保護
指導委員の阿比留嘉博氏の参加が
あった。

本 文 目 次

Ⅰ　調査に至るまで……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……2
　(1)対馬の位置……2
　(2)周辺の遺跡……2
Ⅲ　遺跡の調査……7
　(1)遺跡の立地……7
　(2)調査の概要……7
　(3)遺構……7
Ⅳ　遺物……14
　イノ隖・キロズガ浜出土の青銅器……15
Ⅴ　まとめ……15

挿　　図

第1図　豊玉町遺跡分布図……4
第2図　遺構配置図……8
第3図　第1号遺構実測図(1/20)……9
第4図　第2号遺構実測図(1/20)……10
第5図　第3号遺構実測図(1/10)……11
第6図　第4号遺構実測図(1/20)……12
第7図　第5号遺構実測図(1/30)……13
第8図　出土遺物実測図……14
第9図　キロズガ浜出土の粟粒文十字形把頭金具……15
第10図　イノ隖・キロズガ浜出土の青銅矛……16

表

第1表　豊玉町遺跡地名表……5

図　　版

図版1　遺跡遠景……18
図版2　第1号遺構検出状況……19
図版3　第2号遺構検出状況および下部構造……20
図版4　第3号遺構検出状況および下部構造……21
図版5　遺構検出状況（全景）……22
図版6　イノ隖遺跡出土の遺物およびキロズガ浜出土の中広銅矛……23
図版7　磨製石鏃の出土および調査風景……24

I　調査に至るまで

対馬島を上下に二分する浅茅湾は，複雑に入り組んだリアス式海岸として知られる景勝の地でもあるが，津々浦々の岬の突端を利用して，弥生時代以降「埋葬遺構」や「埋納遺構」が多く営まれてきた。このような各種の遺跡は，大陸や朝鮮半島との交流を知る上に欠かすことの出来ない多くの資料を提供した。明治以降，考古学的な調査研究も盛んになり，特に多くの青銅製品の出土は，対馬の置かれた歴史的背景を反映して研究の対象とされてきた。

しかし，当時の遺構が営まれた浦々は，近世以降，多くが干拓や埋め立てにより陸地化されて開発も進んできた。当然のことながら船利用に替って道路網が充実し，狭い道はより拡く整備されると，道路に面した岬の突端も，削平を受けたり様相を変えてきた。

本遺跡も，このような整備拡充の一環として計画された，町道佐保・田線拡幅工事にかかる緊急発掘調査である。

佐保地区は仁位浅茅湾から分岐して，佐保浦が北に向って細長く伸び，佐保川が注ぎ込む，一番奥まった所にはシゲノダンやソウダイが位置し，本遺跡の立地するイノ隈とキロズガ浜は連続しており，遺跡が密集していることでも知られる。

イノ隈遺跡の発見は古く1908年（明治41年）に遡る。旧奴加岳村役場の敷地として開かれた折，「赤焼の土器と石の剣」が出土したといわれ，旧奴加岳村役場遺跡とも呼ばれた。しかしこの際に出土した遺物は，昭和28年頃まで所在したとされるが，役場の統合などもあり今は所在不明である。さらに1962年土取り作業中，広形銅矛の鋒部破片が「板石の囲い」から出土して布で包まれていたという。箱式石棺墓に副葬されていた可能性が強いが，詳細については不明である。その後は今回の調査に至るまで，遺跡が半壊された状況で保たれ，4基の遺構[註1]が現存すると見られていた。

昭和56年にはこの遺跡の立地する，突端に平行して走っている道路の見通しが悪く狭いところから，改良工事計画がもち上がった。町教育委員会は，県文化課へ現地踏査を依頼，県は厳原町において，金石城の発掘調査を行っていた正林・宮崎の2名を同56年12月10日に派遣した。その結果，外見した遺構は3基であるが，新しく検出の可能性もあると判断された。調査期間は約10日間が設定され，翌57年1月13日～1月24日迄の11日間，豊玉町主催で緊急発掘調査が実施され，県文化課職員2名が調査を担当した。

調査は検出遺構の実測図作成と写真撮影を行い，周辺の地形測量を実施，記録保存を図った。

註1．永留久恵「対馬古跡探訪」　1977

Ⅱ　遺跡の立地と環境

(1)対馬の位置

対馬は，佐渡・奄美大島に次ぎ日本で三番目に大きい島である。南北82km，東西約18kmの細長い島で，北は西水道（朝鮮海峡）を隔てて韓国南部と50km余り，南は壱岐島までやはり50km離れた，西方に浮かぶ国境の島である。対馬北部からは天気の澄んだ日，韓国南部の山々を遠望することが出来るし，西海岸では，韓国で使用された多くの生活廃棄物が漂着しているのを間のあたりに見ると，対馬が古くから飛び石的役割を果してきた歴史が，現実のものとして肌で感じられる。

島の総面積は約 710km²，しかしその87%が山林で覆われ平担地が少ない[註1]。河足が短いため西海岸側の佐護・仁田・三根・小茂田・久根田などに，わずかに沖積地が開けている程度である。地形的には沈降現象により複雑に入り組んだ浅茅湾によって上・下の島に分けられるが，行政的には上県郡・下県郡の２郡６町によって構成される。

遺跡の立地する豊玉町は下県郡に属し，北を峰町，南は浅茅湾をはさみ美津島町と境を接して，西海岸と東海岸を合わせもつ。

(2)周辺の遺跡

豊玉町は，地理的に大別すれば大漁湾と曽湾の東海岸地域，三根湾から唐洲崎に至る西海岸地域と，東に大きく入り込んだ浅茅湾の一支湾である仁位浅茅湾に分けられる。しかし仁位浅茅湾も，最奥部の仁位川の注ぐ仁位周辺と，本遺跡の位置する佐保浦周辺に遺跡の集中が見られ，対馬における弥生後期を中心とした一大地域であったことを窺わせる。

以下主要な遺跡について概観してみよう。

東海岸では先ず，**2**の住吉平貝塚[註2]をあげることができる。1973年に調査された貝塚は，曽浦の湾奥に位置しA～Dのグループに分けられ，縄文時代終末の夜臼式土器や，板付Ⅰ・Ⅱ式土器が出土して貝塚が連続して営まれていることが判明した。同時期の遺跡としては，峰町の吉田貝塚[註3]があげられる。曽川を西に遡ると**4**の蒙古塚がある。ここは1948年（昭23）東亜考古学[註4]会により調査され，石積の石室から土師器・金海式土器や碧玉製勾玉・ガラス小玉類などが出土して，５世紀頃の古墳であることが判明した。他には大漁湾に面した**5**の弥生式土器の散布する鑓川遺跡や**6**の元島の石棺が位置する。

西海岸の綱浦の奥，**7**の大綱では1919年（大８）中広青銅矛11本が一括して出土，埋納遺構と考えられる。現在は東京国立博物館に一括保存されている。南へ下って一番西側の半島状に突出したつけ根の南側に，**38**の西加藤海底遺跡が位置する[註5]。遺跡は満潮時海底に没するが1973年長崎大学によって調査が行われ，縄文時代早期の押型文土器，中期の阿高式，後期鐘ヶ崎式，南福寺式それに半島系の櫛目文土器が出土して，数少ない対馬における縄文文化の解明と，半

島の関係が古くから行われていたことを実証した。翌年1974年この位置からさらに西へ離れた唐洲と廻の間に40のヌカシ遺跡が発見された。畑整地中に出土したもので，縄文後期の南福寺式を主体に，ここからも櫛目文土器が確認され，また遺構では炉址が検出された。町内における縄文時代の遺跡は３ヶ所を数える。

仁位浅茅湾の奥部仁位地区にはかなりの遺跡が集中する。仁位川の河口近くに開けた水田は，殿様開と云われるように，永禄時代に干拓され旧地形が変化している。満潮時には浜殿神社付近まで潮の流入を見る。仁位の町から東の千尋藻に通じる山合い，8の山田からは，石剣の出土がある。9は現在開発が進み家々が建ち並ぶが，弥生式土器や須恵器が採集されている。この地は14世紀中頃島政改革を進めた宗頼次の館跡があった所で豊玉高校造成の折，多数の中国製青磁・白磁や高麗青磁[註6]などが出土している。15のハロウ遺跡[註7]は1970年と1979年の２回にわたり発掘調査が行われ，その結果８基の箱式石棺が調査され，広形銅矛・小形仿製鏡・磨製石剣・弥生土器や半島系の土器が出土，弥生時代中期中頃から古墳時代に至る時期に位置付けされる。

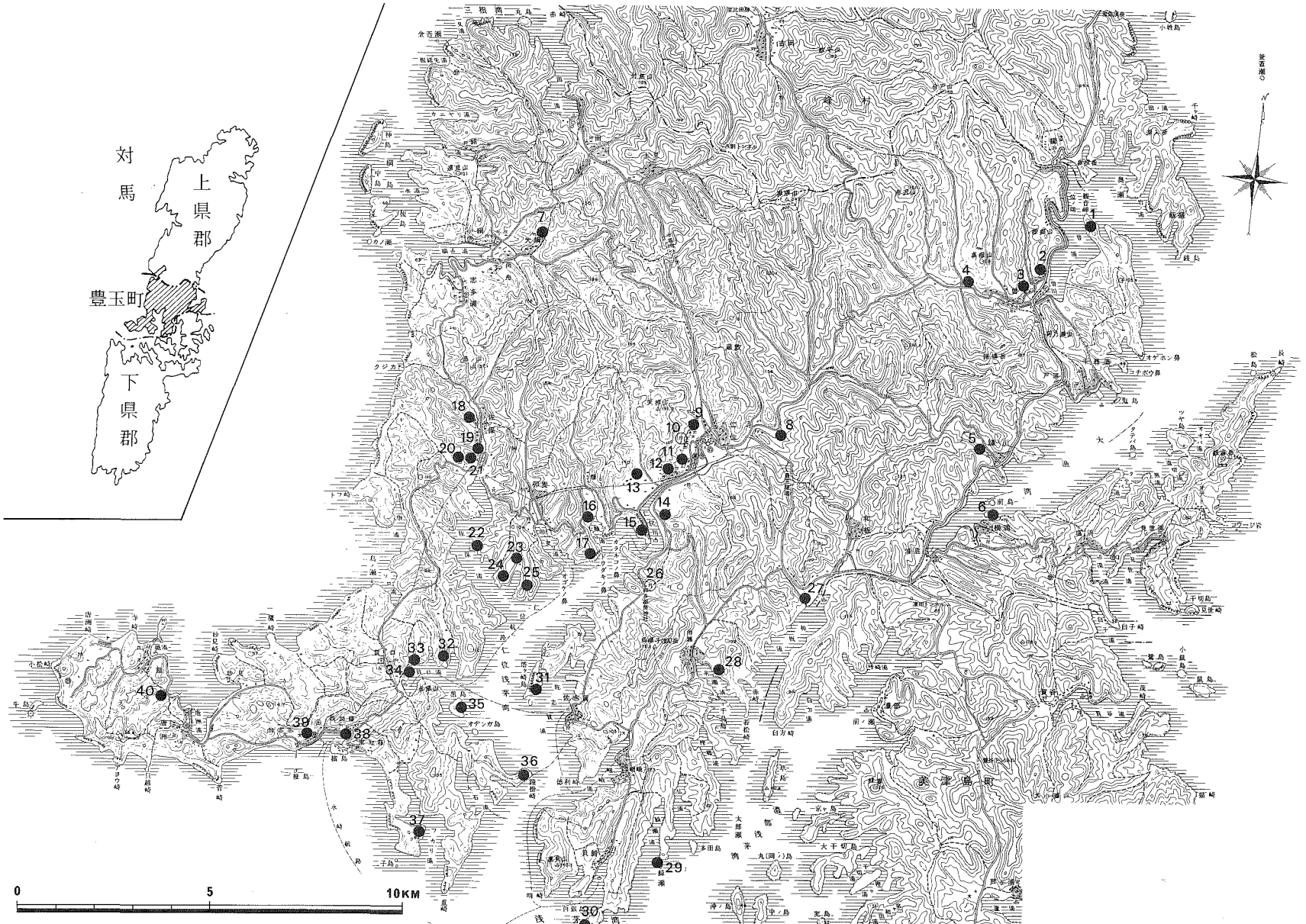
佐保浦の奥部佐保地区は18～21の遺跡が群集するが，別項で述べるので省略する。浦の入口には22～25の遺跡が集中する。22黒木南鼻と24赤崎は1970年調査が実施され，前者の石棺から馬鐸・鍔金具・銅釧・玉類と弥生時代後期の土器が伴っている。後者は４基の遺構から小形内行花文仿製鏡・鍔金具・碧玉製管玉・ガラス玉類などが出土している。弥生土器から中期初頭から前半に位置付けられている。[註7]

貝口浦北岸に突出した32のスス浦崎も石室状の遺構が存在し，須恵器編年上第Ⅱ期[註8]の資料が多く得られており対馬の須恵器編年のうえで重要な要素をもつ。すぐ対岸には33の寺浦崎が位置する。２基の箱式石棺墓からは，須恵器・紡錘車・玉類が出土しているが，破壊された遺構の状況や出土土器から弥生時代終末，古墳時代を中心として奈良時代にかけて墳墓として営まれたといえる。

浅茅湾の湾口東側に細長く突出した岬がある。貝鮒崎と呼ばれる先端に30が所在する。この地名の起りは，「海夫浦（かいふな）」「海船（かいふな）」と呼ばれ，太宰府に貢納する物産の集積地[註9]であり，多くの，船手（ふなかた）が住んだからといわれる。1968年の調査では，墳丘を伴った箱式石棺内部から鉄剣・鉄矛・鉄刀子・勾玉や玉類・須恵器など数多く出土した。須恵器は第Ⅱ期に属し，６世紀初頭頃に位置付け[註10]されている。

濃部浅茅湾の支湾である和板浦の奥に，27の敷島遺跡が位置する。大部分は削られているが，古墳が所在したと言われる。28の糸瀬浦は古墳時代後期の石棺が確認されているが，破壊を受けており詳しくはわからない。さらに南の湾に突出した岬に29の鯨瀬が位置する。先端に２基の箱式石棺が所在。1968年の調査では棺内の清掃が行われたが，遺物の存在は認められなかった。[註11]

遺跡ではないが，対馬には古くから神社に青銅矛が所蔵され，神代鉾[註12]として伝えられてきた。10の和多都美御子神社には広形銅矛１本が所蔵され，26の和多都美神社には広形銅矛４本が所


対馬
上県郡
豊玉町
下県郡
0
5
10KM

第1表　豊玉町遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	出土遺物
1	観音崎	千尋藻	弥生終末～古墳	弥生式土器・土師器・金海式土器・須恵器
2	住吉平貝塚	曽住吉	縄文晩期～弥生	夜臼式・板付Ⅰ・Ⅱ式
3	輪島石棺	曽輪島	古墳	石棺・須恵器
4	曽の蒙古塚	曽	古墳	積石石室・土師器・金海式土器・玉類
5	鑓川	鑓川	弥生	弥生土器・散布地
6	元島	横浦オロシカ浦	古墳	石棺
7	大綱青銅矛出土地	大綱	弥生	中広青銅矛11本一括
8	山田	仁位山田		磨製石剣
9	桜町	仁位桜町	弥生・古墳・中世	弥生土器・須恵器・青白磁
10	和多都美御子神社	仁位		青銅矛
11	貝吹壇	仁位貝吹壇	弥生～古墳	石棺
12	堂ノ内	仁位堂ノ内	縄文？～弥生	有柄式石剣・黒曜石・土器片
13	ハラフ	仁位	弥生～古墳	土器散布地
14	東の浜	仁位和宮	弥生中期？	細形青銅剣
15	ハロウ	仁位浦	弥生～古墳	弥生土器・銅矛・小形仿製鏡
16	糖浦	卯麦糖ノ浜	弥生	青銅矛3本・青銅剣
17	亀ノ岩	卯麦亀ノ岩		散布地
18	シゲノダン	佐保シゲノダン	弥生	中広銅矛・変形細形銅剣・剣把頭他多数
19	イノ隈	佐保イノ隈	弥生	石棺・青銅矛・剣・把頭
20	唐崎	佐保唐崎	弥生後期	鞘先銅器・角形銅器・笠形銅器
21	キロズガ浜	佐保キロズガ浜	弥生	青銅矛
22	黒木南鼻	佐保黒木	弥生後期	石棺・馬鐸・鍔金具・弥生土器
23	唐船	卯麦唐船	古墳	石棺
24	赤崎	卯麦赤崎	弥生後期	小形仿製鏡・青銅製剣把・鉄剣
25	蒙古塚	卯麦唐船	古墳	
26	和多津美神社	仁位		広形青銅矛4本
27	敷島	和板敷島	古墳	不明
28	糸瀬浦	糸瀬	古墳	不明
29	鯨瀬	嵯峨鯨瀬	弥生？	不明
30	貝鮒崎	貝鮒崎	古墳	高塚墳丘の石棺・鉄剣・玉
31	塔ヶ崎	佐志賀塔ヶ崎		青銅矛3本，現存せず
32	スス浦崎	佐志賀スス浦崎	古墳	須恵器
33	寺浦崎	貝口寺浦崎	弥生終末～古墳	石棺・弥生土器・半島系土器・ガラス小玉
34	貝口赤崎	貝口テナシ浦	弥生後期～古墳	弥生土器・土師器・金海式土器・須恵器
35	黒島の青銅矛出土地	佐志賀黒島		広形青銅矛15本一括出土
36	鐘掛崎	佐志賀鐘掛松	古墳	金海式土器・ガラス小玉
37	ナギナタ崎	深里		石棺
38	西加藤海底	加藤水崎浦	縄文早期～中期	押型文・鐘ヶ崎式・櫛目文土器
39	加々志	唐洲加々志	弥生前期～終末	石棺・有柄磨製石剣・磨製石鏃
40	ヌカシ	廻	縄文中期・後期	南福寺式・櫛目文土器

蔵されている。他に峰町木坂の海神神社に広形銅矛が6本，同町奈須加美の金子神社にも広形銅矛13本が所蔵されている。

周辺の遺跡を概略したが，町内には縄文時代から生活が営まれていた訳で，その当時から半島との交易が行われていたと見てよい。島内における弥生時代墓制の初期の段階には，磨製石剣や土器などが副葬品として主体であったが，中期以降後期になると，豊富な副葬品をもった石棺墓が多くなる。しかし，漢鏡や細形銅矛など中期頃まで遡るものが副葬される遺跡は，ガヤノキやエーガ崎，木坂などに見られるように，浅茅湾から離れた仁田などの北部の地区に多くみられる。

後期になると，各湾の地域では貧弱な副葬品にかわって，各種の青銅製品が豊富に見られるようになり，交易活動の活発化が窺われる。いわゆる海洋民集団が各地で組織化され，「航海の安全を祈願する」[註13]という性格の「埋納遺構」が営まれるようになる。7の大綱で11本の一括出土や35の黒島での15本，16卯麦糖浦3本の広形銅矛が埋納されていた事実は，このことを裏付けるものである。仁位・佐保浦を中心とする地域は，奥深い湾と無数の突出した岬を合わせ持ち，弥生時代後期から古墳時代にかけ，海洋交易活動の拠点を形成したといえよう。

註1　長崎県対馬支庁『つしま百科』1977
2　坂田邦洋『対馬の遺跡』1975
3　水野清一，樋口隆康，岡崎敬『対馬』東亜考古学会　1953
4　3に同じ
5　坂田邦洋「石器時代の対馬」考古学ジャーナル　1980
6　永留久恵氏，小松勝助氏の御教示による
7　豊玉町教育委員会『ハロウ遺跡』高倉洋彰編　1980
8　永留久恵『対馬古跡探訪』1977
9　長崎県教育委員会『対馬』長崎県文化財調査報告書第17集　1974
10　9に同じ
11　豊玉町教育委員会『豊玉町の文化財』1978
12　永留久恵「矛と祭り」－対馬の銅矛を中心として－　森貞次郎博士古稀記念古文化論集　1982
13　武末純一「壱岐・対馬」三世紀の考古学下巻　1983

Ⅲ　遺跡の調査

(1)　遺跡の立地

仁位浅茅湾から北に分岐した佐保浦は深く入り込んでいる。湾の奥にはシゲノダンやソウダイの位置する佐保の集落が点在し，その奥には，標高137mの岳ノ山がそびえ，佐保川はここに源を発し湾に注ぎ込んでいる。河口は，仁位を起点とする加藤，唐洲に至る町道と，佐保を抜け大綱・田方面に至る道路の分岐点になっている。現在は水田が開けているが，満潮時には本遺跡の上流まで海水の流入を見る。イノ採遺跡の立地は，西方の山魂から佐保川に舌状に伸びる丘陵先端に位置した，かつては海中に突出した岬である。小さな谷を隔てて南側に隣接するキロズガ浜からは，1979年花壇建設のためブルドーザーを入れて造成工事を行っていたところ，中広銅矛１本が出土している。(第10図２・図版６）この他にも同場所で採集されたという広形銅矛の袋部（第10図１）があり，ともに町教育委員会に保管されている。イノ採・キロズガ浜も地番を異にしているとはいえ，連続する同一の遺跡として取り扱われるべきであろう。ここから西の至近の距離には数々の青銅器と，後期初頭に位置付けられる土器を出土した唐崎の石棺が，今では陸化した岬の先端に所在する。

(2)　調査の概要

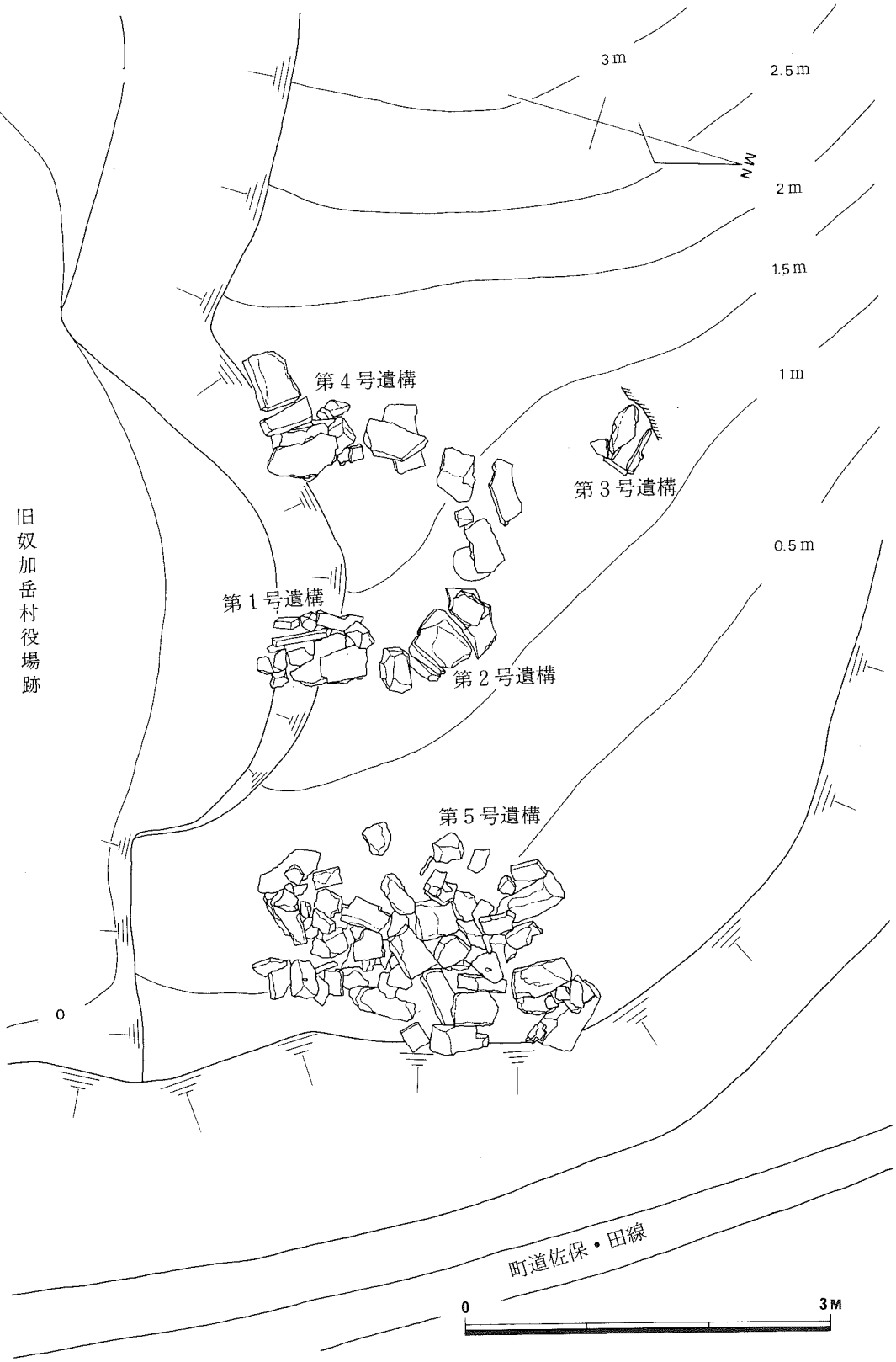
遺構は，旧奴加岳村役場跡北側の自然地形を保っている部分の，狭い範囲に限られる。すでに第１号遺構は，土取りによって小口がむき出しになり，どのくらい残されているかに興味があった。また表面に散在している礫から，道路に一番近い方を第５号遺構，一番高い所に露出している礫群を第４号遺構と呼んだ。掘り進めて行くと，第１号石棺の北側に第２号遺構が位置し，さらに第３号遺構が検出された。この石棺は非常に小形のもので小児用である。

遺跡の主体部は，旧役場跡の「石囲いから銅剣」の発見があったように，すでに平担地として造成された部分と，キロズガ浜を含んだ地域と考えられる。したがって今次調査地点のすぐ北側は谷状の凹地になっており，かろうじて残された部分ということになる。調査範囲は，道路拡幅部分に限定したが，第２号遺構より上の方に遺構の存在する可能性は極めて少なく，今回の記録保存措置は重要な意味を持つと思われる。

(3)　遺　構

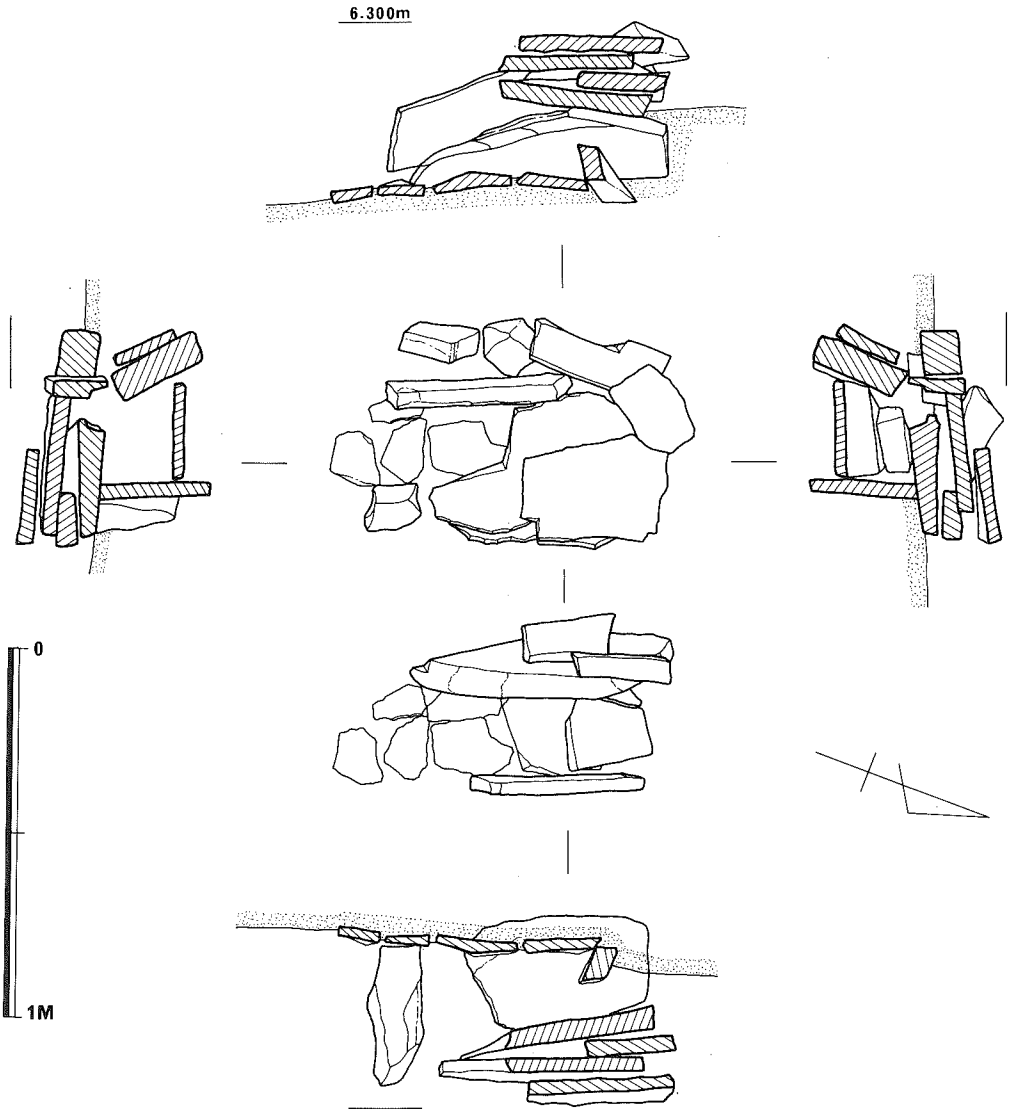
第１号遺構

第１号遺構は標高６ｍ台の傾斜地に位置し，削平された壁には小口がのぞき，表土で厚く覆われた箱式石棺である。上から剝いで行くと，蓋石は残されていた。４枚に重ねられているが，両側板をまたぐものは１枚で，他は小口板との間をふさぐように組まれたものと，少し原位置


3m
2.5m
2m
1.5m
1m
0.5m
N
第4号遺構
第3号遺構
第1号遺構
第2号遺構
第5号遺構
旧奴加岳村役場跡
0
町道佐保・田線
0
3M

第2図　遺構配置図

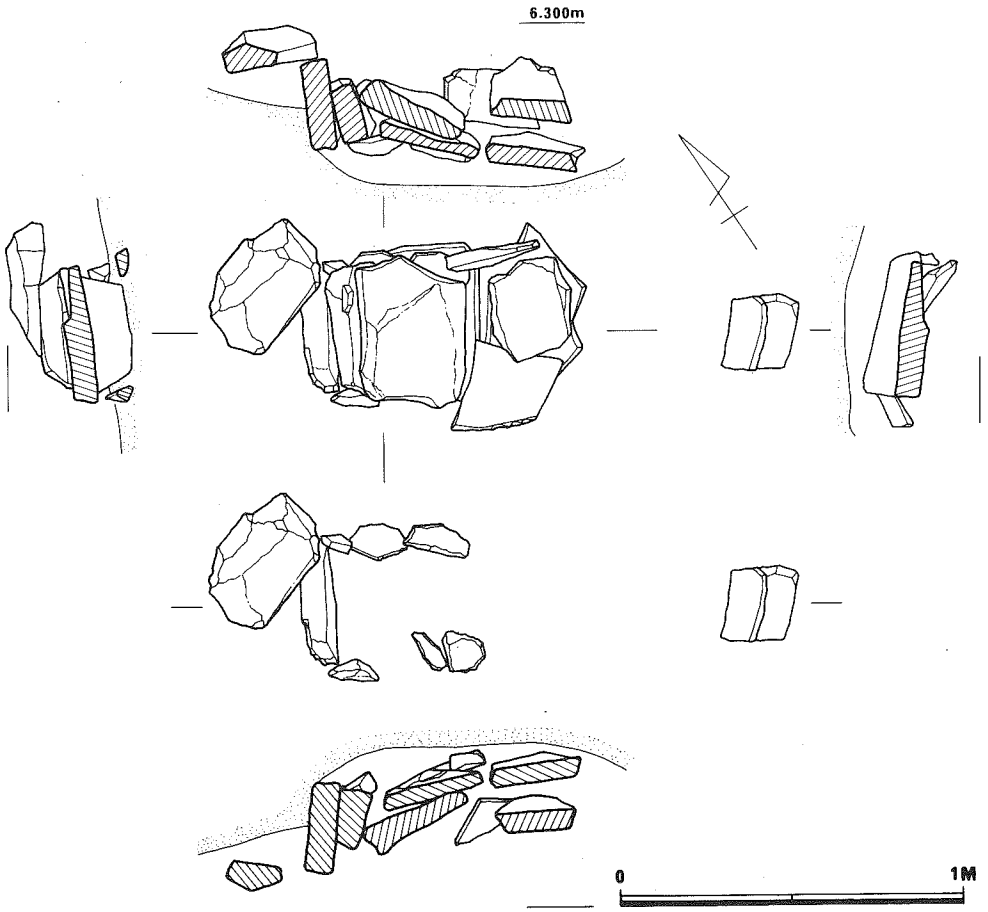
からずれたものがある。側板は両側に長さ50cmの板石が１枚と，それを補足するように，やや厚めの石が斜めに組んである。東側は長さ70cmの板石が１枚残る。主軸はN-20°-Wで，幅の内法は約30cm，蓋から棺底まで30cmを測る。底には比較的小形の板状の石が組合せて敷かれている。残っている北側の小口は，厚い石が置かれ，側板や敷石の状況から棺長は１ｍ以上に達すると思われる。側板の掘り込みについては確認できなかった。また遺物についても，棺の内外から全く認められず，小口があいていたことから，すでに役場整地の際に持ち去られたものであろう。



第３図　第１号遺構実測図（1/20）

第２号遺構

第１号遺構のすぐ北側に位置し，標高も同レベルである。表土に全面覆われ，傾斜した地表から50㎝～１ｍ下に検出された。主軸はN-60°-Eを測る。南東の小口は厚い石がやや傾斜して１枚立てられている。この小口の上に大きな礫が１個あるが，本遺構とは直接つながりが見い出せない。蓋石と考えられる石は５枚にのぼるが，西の方へ傾斜している。蓋石と思われる板石を取り除くと，下には拳大程の礫が２列に並び，上の板石を支えている。礫は全部で６個あり，全体の板石を支えるまでには至ってない。長側板は最初から構築されておらず，また土壙と見られるような掘り込みもない。現存する遺構の長さは約80㎝，幅は30㎝を測り，約半分が欠失していると考えられるが，後世の攪乱や盗掘による土層の乱れもない。しかし，さらに西側を掘っていったところ，南西の小口から130㎝余り離れた所に，２枚の重なった板石が斜めに出土した。方向と長さから，北東に位置する小口板ではないかと推定される。だが，途中の棺材は完全に消失しており，いつの時点でなぜ抜き取られたのか，不明である。明確な掘り込みなど確認されないが，小口や蓋石がしっかりしていることから，石蓋土壙類似の遺構と考えられる。遺物は，土壙の内外および周辺からも確認できなかった。

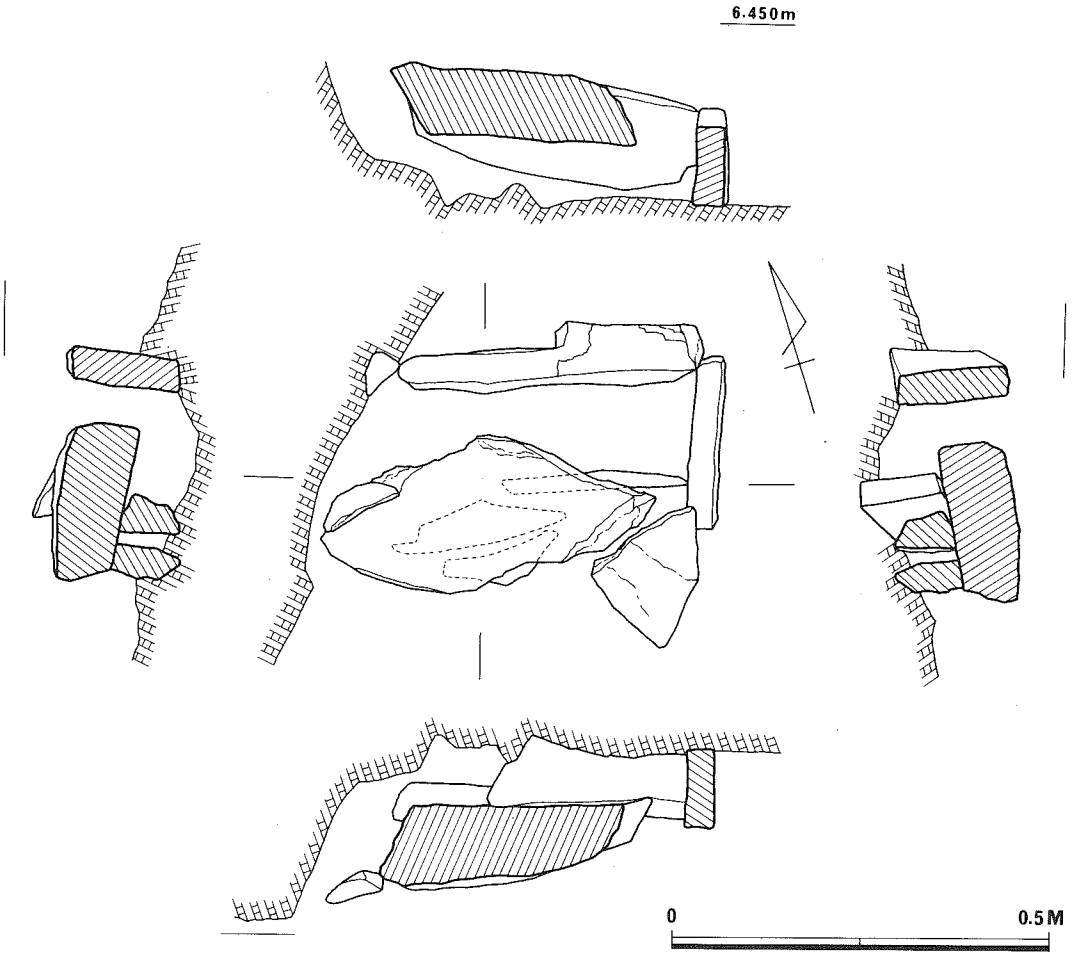


第４図　第２号遺構実測図（1/20）

第３号遺構

遺構群中で一番北西の標高６.３ｍ台の，表土から深い岩盤直上に埋置された，非常に小形の箱式石棺である。棺身内法は長さ約40㎝，幅は約15㎝，主軸はN-70°-Wを測る。蓋石は10㎝程厚みの石が，少し南へずれた格好でかぶる。東の小口板は長さ20㎝，高さ15㎝を測り，長側板の外側に組まれているが，西側の小口板は見られない。これは抜き取られたのではなく，上方から伸びてきた自然の岩盤の露頭を利用した形になっている。棺底までの深さは10㎝余りで浅く，床面は凹凸をもった岩盤である。棺の内外から遺物の出土は認められなかった。

この遺構は小児用と思われるが，現在対馬における類例は，美津島町中道遺跡で検出されている。棺の内法は長さ60㎝，幅30㎝，深さ30㎝でやや大きい。他では，昭和57年調査が行われた大村市富の原遺跡群[註2]では，弥生中期後葉の甕棺墓と一緒に，時期の明確に決定出来ない石棺墓も群集して検出されているが，その中で棺身が長さ約50㎝，幅約30㎝の小形の石棺墓が出[註1]

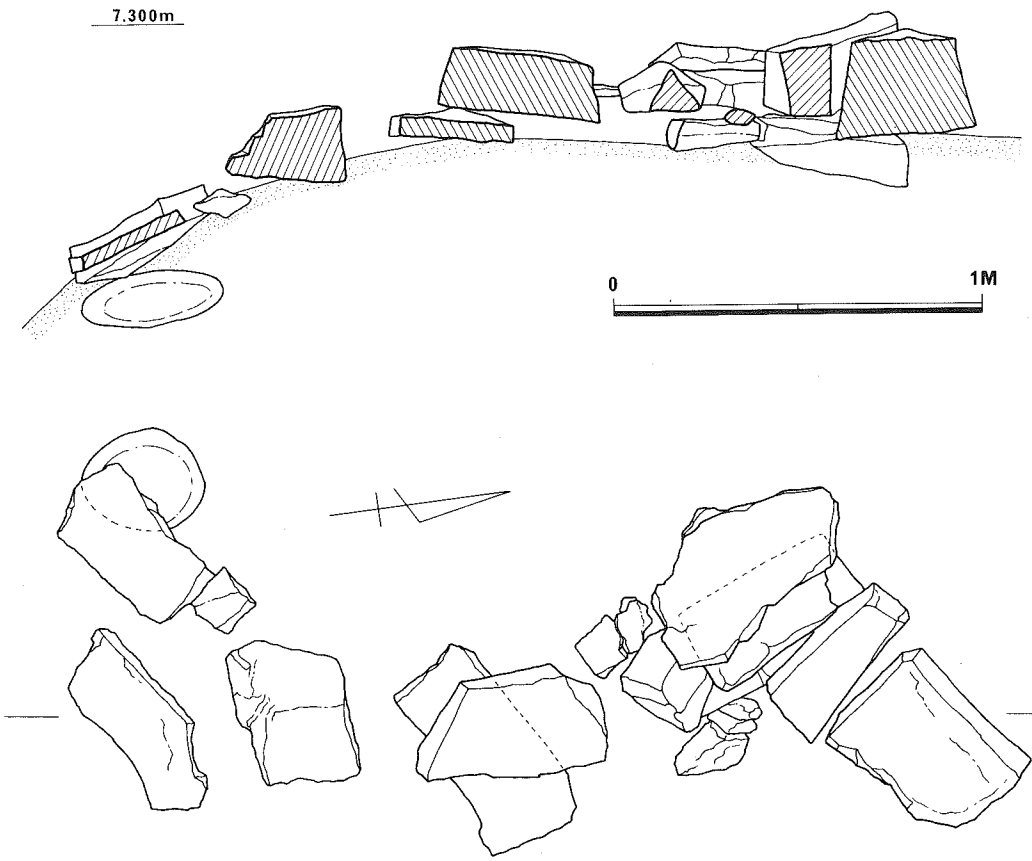


第５図　第３号遺構実測図（1/10）

土している。この石棺の場合は，小口板が長側板にはさまれて組まれているところが本例と違う。また同年に調査が実施された北松浦郡鹿町町大野台遺跡[註3]は、縄文晩期終末から弥生時代にかけて，支石墓の群集する遺跡として著名であるが，この遺構中の第32号が小形の箱式石棺である。蓋石はなく，小口は両方とも長側板の外側に組まれている。棺身の内法は長軸35㎝，幅は17㎝を測り，遺物は認められないが，近くから広形銅矛袋部片が出土しており時期的に関連づけられると思われる。また福岡県下では，酒殿遺跡，採銅所宮原遺跡，宮の前遺跡から小児用石棺墓の出土例[註4]が知られている。

第４号遺構

遺構群中で，標高７ｍ台の一番上段の傾斜が強い所に位置し，一部露出している礫もあった。集石遺構と呼んだが，主体部分は土取の際壊されたと考えられ下部遺構は何も認められない。北方向に並ぶ格好で点在する礫は，傾斜のためすべり落ちた状況と判断される。遺物は何も確認されない。

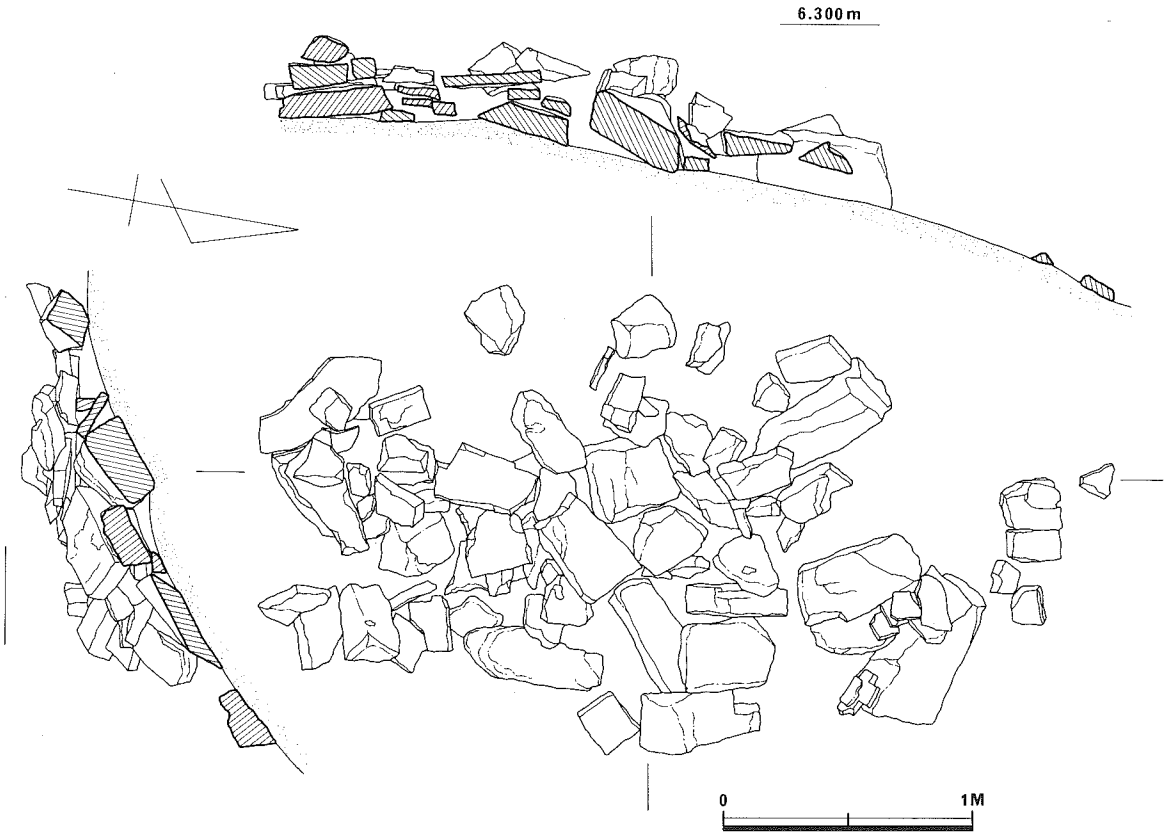


第６図　第４号遺構実測図（1/20）

第５号遺構

集石遺構の一番下に位置して，東側は道路によって削平され，かなり攪乱を受けている状況であり，原位置を保っていない礫もあると考えられる。表土を剥ぐとすぐに大形の礫が現われ，南北３ｍ，東西２ｍの範囲に，傾斜に沿って拡がる。遺物は礫の上面に磨製石鏃１点と陶質土器片１点，土師器片2点が出土したが，この遺構に属するものか不明である。礫を全部取り除いた下部からは，遺構らしいものは認められず盗掘に会った可能性が大きい。

註１　美津島町教育委員会　『洲藻遺跡』　美津島町文化財調査報告書第２集　1980
　２　大村市教育委員会　　『富の原遺跡群確認調査概報』　大村市文化財調査報告第４集　1983
　３　鹿町町教育委員会　　『大野台遺跡』　鹿町町文化財調査報告書第１集　1983
　４　高倉洋彰　「墳墓から見た弥生時代社会の発展課程」考古学研究78　1973



第７図　第５号遺構実測図（1/30）

Ⅳ　遺　物

本遺跡における遺物の出土は少量であった。内容は，陶質土器１点と古式土師器２点，それに磨製石鏃１点の合計４点にすぎない。遺構中からの出土も無く，決定的な時期的問題を解決するには至らない。

陶質土器（第８図１）

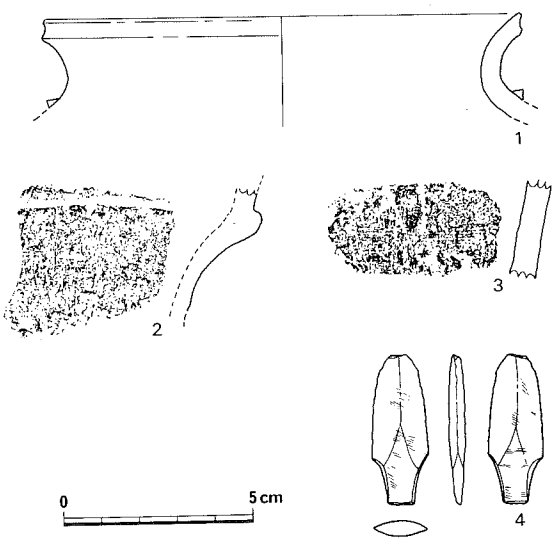
短頸壺形土器口縁の破片である。復原口径はおよそ12.5㎝，ゆるく外反する。口縁端はやや尖り気みにおさめられ，直下にわずかな凹みと突起がめぐる。頸部つけ根には，小さく貼りつけた瘤状突起がつけられているが，割れ口にあたり，わずかしか残らない。器壁内外面には，ヨコナデによる仕上げが行われている。胎土は精選され焼成もよく，硬くしまっている。色調は内外とも灰色を呈している。なおこの土器の類例は，美津島町中道遺跡や上県町佐護クビル遺跡で知られ，ともに格子目文を有する軟式の，金海式土器胴部から肩にかけての所に瘤状突起が付けられている。

土師器（第８図２・３）

古式の土師器に属するものである。全体の形状は不明だが，二重口縁壺形土器片と思われる。小破片で内面は剝落している。胎土には石英粒を多く含みやや粗いが，焼成は良い。色調は褐色を呈する。外面の頸部つけ根には，弱い丸みをおびた段がつく。器表は横にハケ目が施されている。３も同様の土器で２と同一個体と思われる。

磨製石鏃（第８図４）

有茎の磨製石鏃である。現存長3.9㎝，幅1.4㎝，厚み0.2㎝の小形で，先端部をわずかに欠く。刃部長は 2.6㎝，茎は内側に狭められたようにゆるくカーブして，1.3㎝を測る。刃部断面は菱形をしているが，茎は平たい長方形である。鏑は中央から茎部両端に分かれ明瞭に残る。

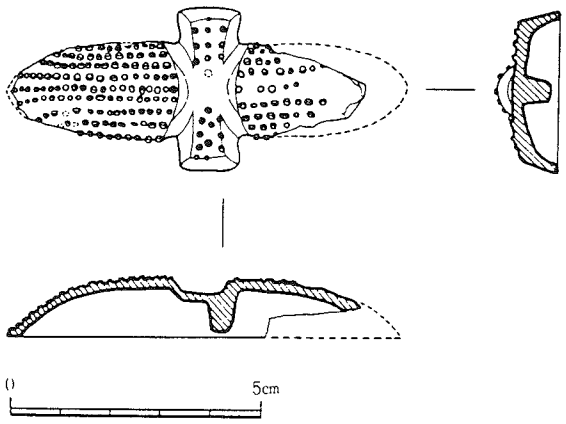


第８図　出土遺物実測図

イノ隈・キロズガ浜出土の青銅器

1962年に道路の土取り作業中，字イノ隈で出土した広形銅矛（第10図1）と1979年花壇建設の際，字キロズガ浜から出土した中広銅矛（第10図2）および粟粒文十字形把頭金具（第9図）である。前者については，すでに長崎県教育委員会編『対馬』に述べられており，後者については豊玉町教育委員会編『ハロウ遺跡』に詳しく紹介されているとおりである。

本報告書では同一遺跡としての認識から，あらためて掲載するものであり検討は特に加えないが，中広銅矛については計測値を加えておく。



第9図　キロズガ浜出土の粟粒文十字形把頭金具

V　ま　と　め

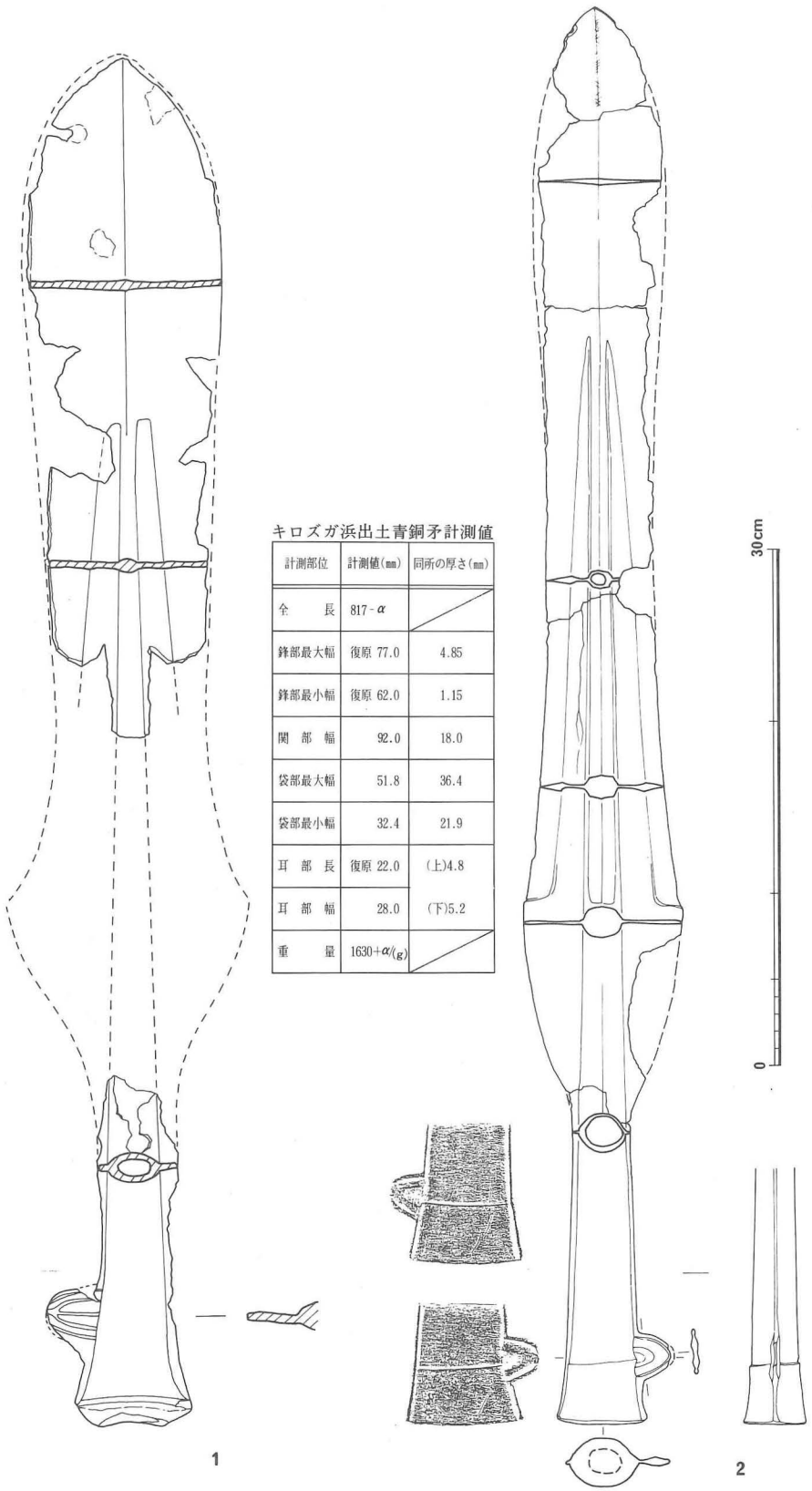
今回の調査では，5基の遺構を検出したにもかかわらず，直接遺構に結びつくような遺物の出土がなかったことや，その量的少なさから時期的な問題が解決できなかった。しかしキロズガ浜とイノ隈を同一の場所に立地した遺跡と考えた場合，その出土遺物からある程度の時期を与えることができる。

明治41年に旧奴加岳村役場が造成された際出土したといわれる「赤焼の土器と石の剣」は，現在所在不明となっており，どのタイプに属するのか，弥生式土器であったのか否かもわからないままである。しかしその後の青銅製品の出土は時期を異にしつつも，弥生時代後期の主要な遺物である事実にかわりはない。

遺構では，第1号遺構に見られる長側板の組合せや，敷石の状況，また第2号遺構にみられる石蓋土壙類似の検出と，遺構の構成が，成人墓の中に小児石棺墓を含むことから，中道壇遺跡や福岡県下における2・3例の遺跡と共通した点をもつ。

遺物については陶質土器片が，中道壇遺跡や佐護クビル遺跡出土例と同様の特徴をもつ。器形に多少の変化は見られるものの，同系統の陶質土器は3～4世紀代を中心に出土することから，本資料も同時期頃に考えられよう。

以上のことからイノ隈遺跡は，弥生時代終末頃に営まれた石棺墓を中心とする遺構群といえる。佐保浦周辺に位置する遺跡群も同じ時期に属しており，この地域が当時の海洋民集団の一翼を担っていたことを窺せる。



キロズガ浜出土青銅矛計測値

計測部位	計測値(mm)	同所の厚さ(mm)
全　長	817-α	
鋒部最大幅	復原 77.0	4.85
鋒部最小幅	復原 62.0	1.15
関部幅	92.0	18.0
袋部最大幅	51.8	36.4
袋部最小幅	32.4	21.9
耳部長	復原 22.0	(上)4.8
耳部幅	28.0	(下)5.2
重　量	1630+α/(g)	

第10図　イノ隈・キロズガ浜出土の青銅矛

図　　版

遺跡の遠望(中央丘陵・向うは佐保浦)

図版1

遺跡遠景

遺跡近景　（西から）

図版 2

第 1 号遺構検出状況（西から）

（南から）

第 2 号遺構検出状況

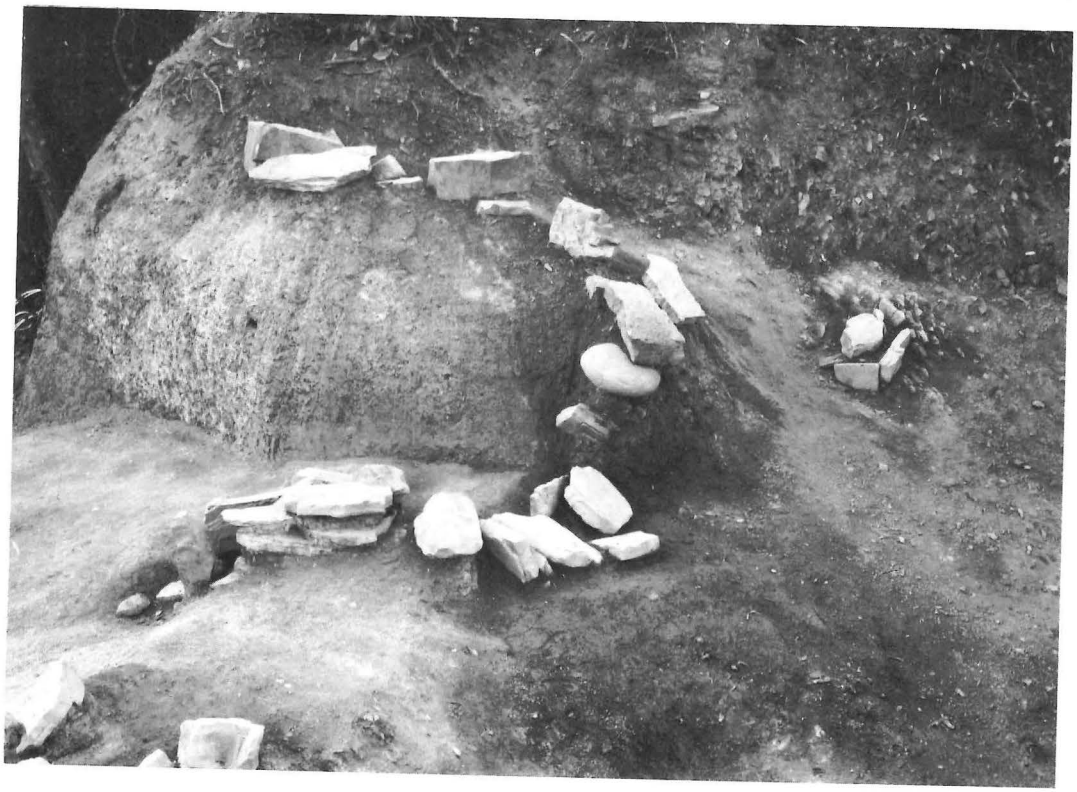
第 2 号遺構下部構造

図版 4

第 3 号遺構検出状況　（北から）

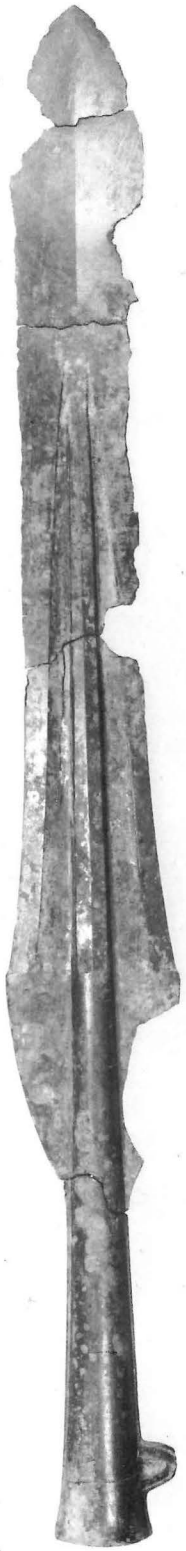
第 3 号遺構下部構造　（東から）

遺構検出状況　（全景）



遺構検出状況　（東から）

図版 6



イノ隈遺跡出土の遺物

磨製石鏃の出土

調査風景

豊玉町文化財調査報告書　第５集

イノ隈遺跡調査報告書

昭和59年３月

発行　豊玉町教育委員会
下県郡豊玉町仁位３８０番地

印刷　川口印刷株式会社
TEL（0958）38－2181(代)